

第8章 小阪遺跡の開発についての一考察

入江正則 〔(財)大阪文化財センター〕

1. はじめに

石津川流域の調査はこれまでにかなりの密度で実施されている。すでに実施された調査は石津川河口付近から和田川と分岐するあたり、中流域、上流域の遺跡の調査がなされて、地形的には氾濫原面、完新世段丘面、段丘Ⅱ（中位段丘）、段丘Ⅰ（高位段丘）の調査と流域のさまざまな地形上で実施されている。これらの調査のすべてにわたって検討を加え、各時代の開発に関する考察を行うのが本来であるが、力量も考え、ここでは(財)大阪文化財センターが実施した近畿自動車道松原海南線並びに府道松原泉大津線の調査を組上にのせて、平安時代以降近世まで石津川流域の氾濫原面、完新世段丘面、段丘Ⅰ、段丘Ⅱの各地形にそれぞれの時代では人々がいかに対応したのか、どのような開発があり、現在の景観にいつごろ至ったのかに主眼を置いて、卑見を披露して批判を仰ぐこととしたい。

2. 石津川流域の地形

石津川流域の地形はすでに各種報告書の中や研究論文の形で報告され、ほぼ明らかにされている。ここではすでに刊行された概要報告書『小阪遺跡南その1』の中に高橋 学氏の論考があり、これに則って述べて行きたい。

石津川河道に沿った部分に氾濫原面が発達し、この背後に完新世段丘面が広がる。両者の比高差は2～3mである。完新世段丘面の背後には比高差約10m以上に及ぶ崖面があり、この上部には段丘Ⅱ、場所によっては段丘Ⅰが伸びている。基本的にはこの4種の地形環境がある。

氾濫原面は太平寺遺跡および小阪遺跡南その1に一部分見られる。完新世段丘面は小阪遺跡その1、2、3、4、5、6、7、8、南その2、および小阪遺跡南その1、太平寺遺跡、西浦橋遺跡のそれぞれの一部分が該当する。段丘Ⅱは万崎池遺跡、菱木下遺跡と西浦橋遺跡の一部分が該当している。また段丘Ⅰは調査区に直接関係してこないが、隣接する伏尾遺跡が該当している。

3. 各時代の遺跡の様相

時代ごとにそれぞれの遺跡にどのような遺構が現れ、どのような遺物が出土したのかをまとめると、次の通りになる。

1) 平安時代

小阪遺跡その3（C地区）

黄色系粘質土層（第1層）この上面に古墳時代の遺構面がある。溝、ピット、落込み、土坑、竪穴住居、井戸が認められる。古墳時代以降は現在の景観とあまり変化ないと推測される。平安時代、近世の遺構も部分的に存在する。

小阪遺跡その5（E地区）

陶器川は流路を変え河跡がバックマーシュとして湿地化するが、ここから室町時代の瓦質小皿が出土する。古墳時代河川2、古墳時代河川3は古代河川2となりその埋没は9世紀、古代河川3の形成も9

4. 各時代の問題点

江戸時代の土坑や埋甕が検出される。溝が現在の条里制の方向に合致し、埋土中から江戸時代の遺物が出土している。近世には完新世段丘面全体の開発がなされていた可能性がある。

万崎池遺跡

近世では土壌、溝、井戸、池等農耕に関する遺構が多く発見された。現在の完備された水利体系が出来上がるまでは、水田あるいは畑1枚ごとに水路や貯水土坑や井戸が設けられていた。段丘Ⅱ上面が耕地化するのには近世前期以降である。

菱木下遺跡

16世紀に入ると灌漑用の井戸や溜池が出現する。江戸時代には段丘Ⅱ上の大半が水田化する。花粉分析結果では稲作とナタネ等の商品作物も栽培されていた。

西浦橋遺跡

段丘Ⅱ上の全面的な開発は埋甕の水溜や肥え溜と考えられる土坑や灌漑用の素掘りの井戸が出現する17世紀以降になると考えられる。

4. 各時代の問題点

1) 平安時代

小阪遺跡では旧河川跡を利用した水田を作るのが、調査されたこの時代の唯一の遺構である。これ以外に完新世段丘面を縦横に横切る溝も調査されておらず、完新世段丘面上の狭い範囲の水の得やすい所のみに水田が営まれていたと考えられる。一方段丘Ⅱ上では溝が開削されはじめ、この頃に開削された溝はほぼ同じ位置に重複しており、段丘Ⅱ上の開発はこの頃に基本的な骨組みが形作られたものと考えられる。段丘Ⅱ上では開析谷等の開発しやすい部分の開発が進められたものと考えられる。しかし当時の技術では水の上げられない尾根筋等の範囲も広くこれらでは開発がなされておらず、全体的に見ると部分的な開析谷部分の虫食い状の開発が進んでいたものと考えられる。

2) 中世

このころでは石津川の完新世段丘面の開発もすすみ少し窪んだ部分やあちこちで水田の足跡が検出されており、水田面積は完新世段丘面上でもかなり増えていたものと考えられる。近世の開発に伴う削平もあっていま一つはっきりしない部分が多いが、水田の形状も一部分条里型区画に似た区域も存在し、一方では僅かに残った形から推測すれば現在の条里型の水路下に水路にとらわれない形の水田が広がっている区域があるなど、おそらく全体的には条里型水田ではない水田が広がる状況が推測される。しかも水利体系はまだ現在の様な大規模な用水網は完備されておらず、埋没河川がまだ窪んでおり、相当部分で谷水を利用した形での用水体系と考えられる。石津川の氾濫原面の開発は中世にも洪水に襲われて削平されるなどはっきりしない。段丘Ⅱ上では開析谷に溜池の堤を築造したり、溝を開削している。このことから中世後半には段丘Ⅱ上もかなりの部分は耕地化していたと考えられる。また和田川の完新世段丘面が耕地化するのには中世前半と考えられる。

3) 近世

近世に入ると小阪遺跡全域から鋤溝や畝溝が検出されるに至り、完新世段丘面全域に水田が作られたと考えられる。また中世まで低湿地として放置されていた旧河川跡地も近世に入り水田化される。近世に入ってようやく陶器川上流から取水する現状の全面的な農業幹線水路網の完成と条里型水田へと耕地の整理がなされたのではないかと考えられる。また段丘Ⅱ上は井戸や貯水槽の掘削、水路の開削等の社

会的整備が進んでようやく全面的に水田化していると考えられる。すなわち石津川の氾濫原面、完新世段丘面及び段丘Ⅱ上を通して見れば、全面的な水田化がなされ現在の様な水利体系と条里型水田と段丘Ⅱ上の水田の、あたり一面の水田景観が展開するのは近世に入ってからではないかと考えられよう。

5. まとめ

石津川流域の広大な沖積地に広がる条里型水田と農業用水網は近世に現在見られるような形に完成したのではないかと結論に至った。しかし中近世に至るまで問題は残されており、奈良時代の開発では、旧陶器川に沿った範囲に水田を検出している。ここでは条里制区画と方向が合致した水田畦畔が調査されており、この頃すでに現在見られるような条里型水田が施行されていた可能性もなきにしもあらずである。しかし自然景観は現在と全く異なっており、陶器川の流路が調査区の東側にあり、石津川の支流が小阪遺跡その3付近に流れたりする。地形環境は全く異なり現在見る水利体系は当時には機能しえないのは明らかである。中世の開発も部分的な水田が検出され、この水田が全面に存在していたかどうか、近世の開発で削平された可能性もあり判らない所が多い。しかし中世の水利体系も現在と同じ形態で存在しえないことは中世の地形環境においても明らかである。そして古代、中世の灌漑用水の溝がほとんど検出されないことから、大規模な用水網が作られなかった可能性が強い。近世に入って旧来の湿地が開発され小阪遺跡その3にある旧河道跡も埋没して水田化され、現在存在する用水網が作られる条件が整備される。陶器川の上流約1 kmに堰を設け延々と農業用水を引く大規模な工事を完成させて、始めて調査区周辺に安定した水が得られる条件が整ったと考えられる。この工事は近世のある時期に施工されたと考えられる。それと同時期に条里型水田の区画整理も併せて施行され、幹線水路から順次水を取り入れることのできる地形への改変、上流の水田が高く、次第に低くなる水田配置がなされたと推測される。大規模な農業幹線水路網の完成とともに高位段丘の開析谷にある溜池は現在では夏涸れ時の非常用の位置しか占めていないが、それまではこれらの溜池の谷水が周辺の水田に非常に重要な位置を占めていたと考えられる。

今、小阪遺跡周辺が現在の様な水利体系と条里型水田の景観でうめつくされるに至った時期を近世以降としたが、これは必ずしも石津川全域にあてはめることはできないと思われる。下流側ではさらに早い時期に全面開発がなされている可能性もあり、石津川流域内においても開発の大きな時期差が存在している可能性がある。それとともに奈良時代の水田をどう理解するかが石津川流域の開発を考える上で大きな意味を持つと考えられる。これらの問題については今後の検討に待ちたい。

また開発時期については近世の開発と記したが実際には中世後期のしかも近世に非常に近い時期の可能性もあり、詳細な時期はもう少し検討が必要である。

かつて段丘Ⅰ上の開発について文献史料を用いて若干の意見を私は述べたが、この中でこれらの段丘Ⅰ上の開発は近世に入ってからで少なくとも18世紀に入る頃ようやくなされたとした。もしそれが正しいとしたとき完新世段丘及び段丘Ⅱ上の開発と段丘Ⅰ上の開発については最大見積もったとしても約1～2世紀の差しか認められず、この石津川流域の小阪遺跡周辺での開発は近世に入ってから、集中的に大規模な開発が行われていたと考えられる。

和泉国の石津川流域の開発状況は河内の大和川流域の平野部の開発状況とは同一ではないと思われる。石津川流域では河川の下刻作用が著しく、河川の豊富な水が利用できない特殊な状況があり、そのために水を得るのに非常な苦勞をしている。この様な地域の状況は畿内一円の開発状況として普遍化すること

5. まとめ

とはできないと思われる。このような様々な地域の開発状況が次第に明らかにされていく、地域の歴史として積み上げられていく、ささやかな一歩として本論考の意義があると思われる。

参考文献

- (財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
(財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
(財)大阪文化財センター 1986 『小阪遺跡（その1）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1986 『小阪遺跡（その2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡（その3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡（その4）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その5）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その6、6-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その6-3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その7、7-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その7-3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その8、8-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その9）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（南その1）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1990 『小阪遺跡（南その2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1991 『小阪遺跡（南その2-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『福田遺跡（その1）—調査の概要—』